

特別支援学校（聴覚障害）における聴覚障害教員の役割および意義

○ 石川 剛己
(埼玉県立特別支援学校大宮ろう学園)

左藤 敦子
(筑波大学人間系)

KEY WORDS: 聴覚障害 聴覚特別支援学校 教員

【目的】

「障害者の雇用の促進等に関する法律」により、特別支援学校（聴覚障害）（以下、聾学校）において障害がある教職員の増加が予想されるなか、文部科学省（2012）は障害への知識の深まりや障害のある児童生徒等にとってのロールモデルなど、障害のある教職員に期待される役割についても言及している。そこで、本研究においては、聾学校に勤務する聴覚障害教員における聴覚障害児に対する役割と影響について明らかにし、聾学校における聴覚障害教員の存在の位置づけおよび意義について検討することを目的とした。

【方法】

- (1)対象：機縁法により、聴覚障害がある 20 歳台の大学生および社会人計 67 名を対象とした。
- (2)手続き：オンラインによる質問調査を行った。対象となる聴覚障害者へ調査依頼書をメールにて送付した。研究協力に同意が得られた場合、調査フォームにアクセスするためのパスワードと URL を送り、調査への回答を依頼した。回答入力をもって同意を得たとみなした。
- (3)質問項目：①困りごとに対する相談相手について（多岐選択法）、②「聾学校の教員」に対する印象（5 件法）、③「ろう者の教員」に対する印象（5 件法）、④「教員以外のろう者の大人」に対する印象（5 件法）、⑤「ろう者の教員」「教員以外のろう者の大人」についての考え（自由記述）、⑥フェイスシート（職業、教育経験、家族の聴覚障害者の有無など）
- (4)分析方法：多岐選択法は選択された回答を 1 として集計をした。5 件法は「とてもそう思う（5 点）」～「全くそう思わない（1 点）」として得点を算出した。自由記述は意味内容ごとに要約し、類似点や特性に応じてカテゴリ化した。

【結果】

- 67 名のうち 31 名から回答を得た（回答率 46%）。
- (1)回答者の主な属性：回答者の職業は「学生」が 17 名、「社会人」が 14 名であった。教育経験は「聾学校経験有」が 27 名、「一貫して通常学校」が 4 名、「通常学校と聾学校の両方経験有」が 19 名であった。高校生段階までに教員以外のろう者成人との関わりの有無は「有」が 22 名、「無」が 9 名であった。ろう者の教員との関わりの有無は、「有」が 25 名、「無」が 5 名、「無回答」が 1 名であった。
- (2)困りごとに対する相談：勉強、対人関係、進路、障害に関する内容の相談相手について回答を求めた。「勉強」「進路」に関する相談相手として「ろう者の教員」と「聴者の教員」の回答は 60%を超えていたが、「障害」に関する相談相手として「聴者の教員」の回答は 60%を下回った。
- (3)ろう者の教員に対する印象：「ろう者の教員」に対する印象については肯定的な回答が多く、「聴覚障害に関する知識や理解の深さ」「ニーズにあったコミュニケーション手段」「アドバイスや体験談の提供」「当事者ならではの強み」等は肯定的回答が多くみられた。Table 1 に自由記述の主な内容を示した。肯定的な回答として「ロールモデル」「理解者」「相談相手」に関する記述が大半を占めていた。その一方で、否定的な記述は少なく、「考え方の偏りの危険性」「災害対応へ

Table 1 ろう者の教員の印象に関する主な自由記述の内容

	ラベル名	要約数	例
肯定的内容	ロールモデル	47	当事者としての体験談やアドバイスをくれる、同じ障害のため自分の理想像を探すのに適していた
	理解者	31	当事者だからこそ気付いたり、わかってくれる、当事者だからこそ踏み込める範囲や指導しやすくなる面がある
	相談相手	23	なんでも相談できる、悩みを気軽に色々と吐ける
	心理的安定	16	価値観が似ているから安心、気が楽になる
否定的内容	考え方が偏る危険性	19	価値観の押しつけにより、偏見を持ってしまう、ろう者の教員の方が発言の影響力は大きい
	教師としての指導力	5	災害時の情報を把握できない、学習指導力が乏しい、聞かれないため、1人だけでは対応できないことがある

の不安」に関する記述がみられた。「教員以外のろう者の大人」を相談相手とする回答率は低かったが、「教育現場以外のことを教えてくれる」「社会に出た後の生活や仕事に関する情報を与えてくれる」などの意見が得られた。

【考察】

「当事者性」に関わる相談相手として「ろう者の教員」が選ばれる傾向が高いことが示唆された。肯定的な回答の中でも「ロールモデル」に関する記述が多数を占めた、全国聴覚障害教職員協議会（2010）が示す「同じ障害のある児童生徒が自己の将来像を描く上での指針となる」の役割を担っており、「当事者」として教育に携わることの影響は大きいと推察される。また、「保護者に色々とサポートができるのが良い」という記述もみられた。保護者の障害認識形成の困難の一因として、成人聴覚障害者との接触の機会が少ないことが挙げられており（小田ら、2004）、ろう者の教員が配置されることで、保護者の心理的な安定がはかられるとも考えられる。「コミュニケーション」に関しても肯定的な印象の傾向が高く、中瀬（2016）の指摘と同様に、ろう者の教員の方が多様なコミュニケーションモードを意識している実態がうかがえた。

一方、ろう者の教員の否定的な側面として「考え方の偏り」に関する記述がみられた。ろう者の教員は、自分の言動が同じ障害をもつ子どもたちに及ぼす影響は大きいということ認識することが重要であろう。さらに、「災害時の情報を把握できない」、「ろう者の教員への情報保障の確保の重要性」などの回答がみられ、「チーム学校」という意識の下で周囲と協働しながら教育に携わることが求められると考えられる。

【引用文献】

- 小田ら（2004）障害児の障害認識に関する全国聾学校調査一般研究報告書「聴覚障害障害児の障害認識と社会参加に関する研究―様々な連携と評価を中心に―」．独立行政法人国立特殊教育総合研究所、48-62.
- 中瀬（2016）聾学校における熟練ろう教員の授業に対する若手、中堅ろう教員による分析―特にろう教員に特徴的な動作や視線等に対する気付きを中心に―．ろう教育科学、58(3)、133-143.
- 全国聴覚障害教職員協議会（2010）「特別支援教育の在り方に関する特別委員会」への意見書
- 文部科学省（2012）資料 5 - 1：特別支援教育の在り方に関する特別委員会報告（委員長試案）（概要）
(Goki Ishikawa, Atsuko Sato)